

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01190

研究課題名(和文) グローバル化時代のバスク・ナショナリズムに関する政治地理学的研究

研究課題名(英文) A political geographical study of Basque nationalism in the globalizing era

研究代表者

石井 久生 (Ishii, Hisao)

国立女子大学・国際学部・教授

研究者番号：70272127

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：スペイン・バスク地方におけるナショナリズム運動は、分離独立を目指す過激な運動から日常的行為としての静かな運動へのシフトが進行している。それは州政府など公的部門によるバスク語正常化運動に限らず、祝祭や集団的記憶の顕彰など、多様な形態をとりながらも住民の日常的な行為に収束した静かなナショナリズム運動として観察される。南北アメリカ大陸のディアスポラでも、1980年代以降、同胞の結束強化を目的とした運動へのナショナリズム・シフトが進行中である。その背後には、バスク州政府外務局を通じた資金や情報の流動があり、大陸間で維持されるモビリティのポストモダンな形態が両者のナショナリズム・シフトを推進している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ナショナリズム・シフトを分析する新しい視点を提供することで、バスク・ナショナリズム研究の分野の新たな方向性を示すことができた。同時に、地理学がナショナリズム研究に貢献するための方法論を提示することができた。こうした視点は日本のネーション形成研究にも応用可能であろうし、周辺諸国との間でネーションにまつわる言説の緊張が高まることに対する解決策を考える一助になるであろう。

研究成果の概要(英文)：The Basque nationalism in the Basque Country is shifting from a radical movement aimed at independence to a silent one as daily act. The nationalism shift is not only limited to the Basque language and culture normalization by the public sectors, but is also practiced as a salient nationalism movement in the private sectors, taking a variety of forms such as local festivals, commemoration of local collective memory, and converging into the daily acts by the Basque people. In the Basque diaspora in the Americas, the nationalism shift has continued form the 1980s, taking a form of reinforcement of the members. The shift is promoted by the flow of funds and information by the Basque Government Foreign Affairs Department. This is a postmodern form of mobility and nationalism shift practiced across two continents.

研究分野：人文地理学

キーワード：バスク地方 バスク・ディアスポラ バスク・ナショナリズム 政治地理学

1. 研究開始当初の背景

スペイン・バスク地方では、中世以来保持してきた地方特権が 19 世紀末に中央政府により廃止されたことを契機に、分離独立を目指す過激で熱いバスク・ナショナリズム運動が展開された。しかし、1978 年に地方自治権と固有の言語の権利を保障するスペイン憲法が制定されたのを機に地方自治権を回復して以降、バスク・ナショナリズム運動はどのように変容したのであろうか。また、バスク人は 19 世紀から 20 世紀中ごろにかけて、南北アメリカ大陸に大量に移住し、同法組織を形成して故地のナショナリズム運動を支援したが、こうしたディアスポラ・ナショナリズムは故地のナショナリズム・シフトにどのように対応したのであろうか。こうした問いが本研究開始時の起点であった。

2. 研究の目的

本研究は、ヨーロッパのバスク地方と新大陸のバスク・ディアスポラにおいて展開されるバスク・ナショナリズムに着目し、すべての地域で共有されるナショナリズムの共通項と、各地域における地理的差異を明らかにしたうえで、1980 年代の移民収束とグローバル化進行という重大な転換と並行して故地バスク地方で進行した民族的ナショナリズムから静かなナショナリズムへのシフトの具体像を解明すると同時に、故地の変化に対応して新大陸各地のディアスポラのナショナリズムがどう対応したかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

フィールドワークで景観や言説をデータとして収集し、バスク・ナショナリズムを景観や言語における表象として観察することで、そのシフトや地理的多様性の実証的検証を試みた。

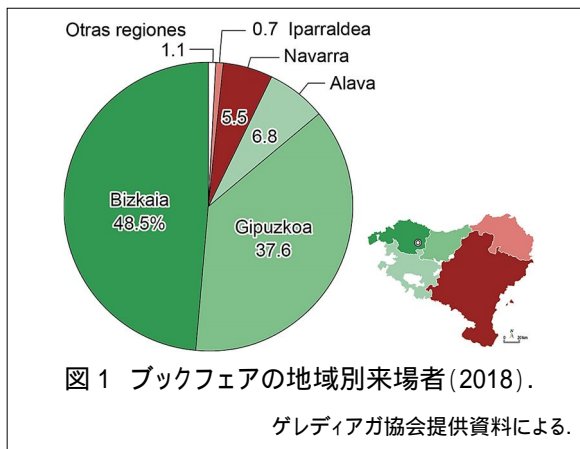
4. 研究成果

(1) バスク地方のナショナリズム

バスク地方は、固有の言語や文化を共有するバスク人の存在と、彼らによる活発なナショナリズム運動で知られる。バスク・ナショナリズム運動が活発になったのは、中世以来保持してきた地方特権が 19 世紀末に中央政府により廃止されたことによる。それ以降、分離独立を目指す過激で熱いバスク・ナショナリズム運動が展開された。しかし、スペイン・バスク地方を構成する 2 州 (バスク州とナバラ州) では、1978 年に地方自治権と固有の言語の権利を保障するスペイン憲法が制定されたのを機に、バスク語やバスク文化の再活性化を目指す静かなナショナリズム運動が活発になった。情動的で熱い民族的ナショナリズムから、日常的な行為の実践により継承されるナショナリズム、いうなれば「凡庸なナショナリズム banal nationalism」へのシフトが進行したのである。ナショナリズム・シフトは、文化再生運動のほかにも様々な場面で観察されるようになる。その具体像を、行事やモニュメントなどの顕彰として具現化される事例をとおして検証する。

(2) 行事化するナショナリズム

ナショナリズム・シフトの結果登場したナショナリズム運動の新たな形態は、祝祭や催事などの日常的な行事として継承される。シフトの過程が観察される事例が、バスク州の地方都市ドゥランゴ (Durango) で毎年 12 月に開催されるブックフェアである。ドゥランゴのブックフェアでは、バスク語の、あるいはバスク文化をテーマにした書籍や音楽コンテンツといった、バスク話者に固有のエスニック資源のみが扱われる。さらに、バスク人ミュージシャンによるコンサート、バスク関係の映画上映会やシンポジウムなど様々な文化的催事が開催され、バスク文化の総合的な祝祭としての性格が強い。こうしたブックフェアの性格上、参加者のほとんどがバスク地方在住者である。2018 年のデータによれば、来場者の実に 98.9% がバスク地方から訪れている (図 1)。バスク地方の中でも、ドゥランゴが帰属するビスカヤ県と、その東に隣接するギプスコア県からの来場者が 81.6% を占める。こうした地域的偏りは、バスク話者の分布を反映している。2011 年の社会言語調査によれば、バスク地方に 71 万 4 千存在すると推計されるバスク話者 (16 歳以上) のうち、35.6% がビスカヤ県、42.0% がギプスコア県に集中する。バスク話者の地理的分布と来場者の出身地域の相関は、来場者の言語属性にも反映され、来場者の実に 92.1% がバスク話者である (図 2)。彼らの来場回数にも特徴がある。年毎の参加を 1 回とした場合、6 回以上来場したことがある者が 68.0%、15 回



以上が 34.5%に達する。毎年のようにブックフェアに来場する彼らの行動を、新聞報道は「年に一度のバスク人恒例の巡礼」として、ドゥランゴをバスク文化の巡礼地のように表現している。

ドゥランゴのブックフェアは、バスク人のためのバスク文化の祝祭としての性格が強いが、開始当初からそうした性格であったわけではない。初回の開催は、フランコ独裁政権によるバスク文化の弾圧が続いていた 1965 年であった。フランコ独裁政権下ではバスク人による政治的活動が厳しく制限されていたため、ブックフェアの発案者らは「地域住民にバスクの文学や音楽を紹介する」という名目で開催許可を得たが、独裁政権下で弾圧されてきたバスクの自治や文化の再生に本来の目的があった (Sarrionandia et al., 2015: 83-85)。1975 年のフランコ死去と 1978 年の自治権確立以降、ブックフェアではバスク文化にかかわる様々な催事も行われるようになり、規模を拡大して現在に至る。

日常的行為にシフトしたナショナリズムとしてのブックフェアの意義を象徴するのが、主催団体である「ゲレディアガ協会 (Gerediaga Elkarte) 」である。同協会は、初回ブックフェア開催時に設立されたドゥランゴ郡の地域振興団体であるが、名称「ゲレディアガ」はこの地域がかつて経験した自治を象徴する地名であり組織名である。ドゥランゴが帰属するドゥランゴ郡は、11 世紀ごろその付近に複数存在した領主国の一つドゥランガルデアであった。同国は 11 世紀中に近隣のビスカヤ領主国に併合され、ビスカヤ領主国も 1379 年にカスティーリャ王国 (後のスペインの母体) に併合されるが、ビスカヤ領主国にはカスティーリャ王国から高度な自治権が与えられていた。それがフエロスと呼ばれる地方特別法であり、その立法機関がゲルニカに置かれた「ゲルニカ評議会」であった。さらにドゥランガルデア郡はビスカヤ領主国において特別な立法権が認められ地域の自治を行うことができたが、立法機関が置かれたのがドゥランゴに近接するゲレディアガであり、その機関が「ゲレディアガ評議会」であった。ドゥランガルデアの自治権は、1628 年のビスカヤの行政改革によりビスカヤ領主がドゥランガルデアの領主を兼ねることになったため同年に失効したが、この地域が自治と独立を実践した記憶は「ゲレディアガ」の地名に刻印され、場所の記憶として今日まで連綿と伝えられてきた。

19 世紀末のスペイン中央政府によるビスカヤの地域特別法撤廃が、熱いナショナリズム運動の引き金になった。そして、バスク州の地方自治権が 1979 年に再確立して以降、熱いナショナリズム運動は日常的な実践により継承される静かなナショナリズム運動にシフトした。その象徴であるブックフェアが、かつての自治の記憶を継承するというバスク・ナショナリズムの重層的な構図にバスク人のネイション形成に寄せる想いの深遠さがあるといえる。

(3) モニュメント化するナショナリズム

静かなナショナリズムがモニュメントとして可視化する場合もある。それは記念碑や議事堂、祝祭などの催事などに代表されるが、これらは集団が継承する記憶を表象する「顕彰」ということができる。集団構成員は、集団が共有する様々な経験や伝承をとおして過去の出来事を継承し、祝祭や展示などのパフォーマンスをとおして過去と現在の記憶の連続性を継承する。さらに集団は有限な時間の中で様々な経験を記憶として継承しつつ、同時に集団構成員が活動する有限の空間の中に活動の痕跡を刻印する。こうして流動的な記憶を永続的で具体的に見せるための空間内での付置、いわゆる「記憶のトポグラフィ」が形成される。場所に刻印された集団の経験は、彼らの社会的記憶を組み立てるだけでなく、記憶を空間的に再構成するといえる。集合的記憶が付置された空間において、モニュメントなどの有形財や催事など無形財に記憶が表象するのが「記憶の場所」である。先のドゥランゴの例は、記憶が催事として表彰した場所であるが、別のかたちで表象した事例として、ビスカヤ県に帰属するアベジャネダにおけるモニュメント化の事例を検証しよう。

中世のビスカヤ領主国には、そのもとで独自の地方特別法の立法権と自治権を認められた下位領域が 2 つあり、一つがドゥランガルデア郡、もう一つがエンカルタシオネス郡であった (図 3)。エンカルタシオネス郡では、地方自治を実践するための地域特別法が 1394 年に編纂されたが、その立法機関が置かれたのがアベジャネダ (Abellaneda) であった。アベジャネダにはエンカルタシオネス郡内 10 地域の代表者が集合し、自治のための評議会が開催された。ひょうぎかいのかいじょうになったのが、アベジャネダに 13 世紀頃に建てられた石造

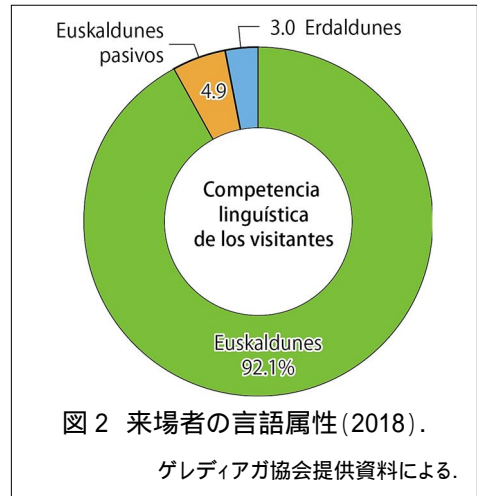


図 2 来場者の言語属性 (2018)。

ゲレディアガ協会提供資料による。

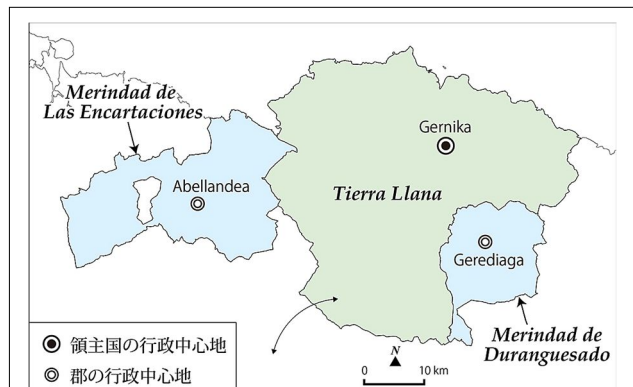


図 3 中世ビスカヤ領主国の行政領域と行政中心。

Pérez (2008), Arizaga and Martínez (2008) などによる。

りの立方体の塔であった。その塔は16世紀末に大々的に改修され、さらに同じ頃にエンカルタシオネス郡の自治を担う行政官の公邸が塔近くに建設されたことで、アベジャネダには地域の自治の記憶が刻印された。しかし、1806年にアベジャネダ評議会がビスカヤ領主国の自治組織ゲルニカ評議会に吸収されると、諸施設は放棄された。

放棄された諸施設を地域の記憶の顕彰として復活させる動きは、20世紀以降進行した。1899年にビスカヤ県主導のもと修復作業開始以降、複数の建築家が関与し、特に1931年から指揮を執ったディエゴ・バステラにより塔の内装の改修が進み、ビスカヤ県はその塔を利用して「エンカルタシオネス博物館」をスペイン内戦開始直前の1934年に開館した。このようにアベジャネダにおける自治の記憶の顕彰は、当初の段階から静かなナショナリズムのモニュメント化としての性格を伴っていたことに特徴がある。その後同博物館は、1968年と1994年に大規模な改修を経て再開している。

改修には行政や多くの建築家が参加したが、改修段階の報告書や手記などから、アベジャネダの自治の顕彰にまつわる彼らの言説を読み解くことができる。特に1942年から1953年にかけて修復プロジェクトを率いた建築家エウヘニオ・アギナガの大改修は様々な議論を呼んだ。アギナガの修復プランは、「アベジャネダの建造物群を構成する建物を統一し、かつての尊厳と荘厳さを与える」(Muños 1991, 8)ことを目的としていた。しかし彼は従来の景観を忠実に再現する手法は取らず、県内の他の建物の修復や当時の美意識などから学んだ知見を修復過程に取り込み、石造りの塔と隣接する地方行政官宅をかつて存在しなかった吹き抜け通路連結し、集会場の壁にローマ式半円アーチをともなう大窓、塔2階部分の広いテラス、塔内の螺旋階段など、中世から近世には存在しなかったであろう構造物を加えた。これについて現在のビスカヤ評議会は、1991年に発効した最近の修復に関する計画書の中で、「1942年から1953年の改修は確固たる論理で進められたが、その論理は折衷的なもの」であり、「古典的で絵画的な建物のイメージは、それそのものの尊厳と優雅さによるものではなく、暗示的でロマン主義的なビジョンによって与えられる」ものであり、「端的に言えば小さなディズニーランドである」と批判している。場所と人との経験との関係が希薄になり、地域性が消失した抽象的空間では、人の経験は理想化して語られるようになり、あたりさわりのない内容に変質し、場所の個性を喪失する「没場所性 placelessness」が強調されるようになる。この報告書が指摘する没場所性は、地域と自治の関係の顕彰としての博物館の役割を考えるうえで大きな障害になる。

しかし、1994年に再度改修された博物館の展示内容は大幅に改善され、これが同博物館のネイション形成との関係を変えることになる。1994年に再開した現在の博物館は、地域の展示・教育・研究を目的として地域の人々の経験を体系的に網羅した「地域博物館」を特徴としている。地域博物館はcommunity museumとしての性格が強く、博物館が特定の人々との間に構築を望む特定のつながりを強調するために登場した形態である。地理的な集団、すなわち地域コミュニティとの関係を強調したのが「地域博物館」であるなら、現在の博物館は、エンカルタシオネス郡という空間的枠組みにおいて地域と人々が経験してきた記憶を博物館に適した資料へと変換して展示しており、こうした行為は場所や物質を保持することを重視する意味での「遺産化 heritagisation」に通じるところがある。こうしてこの場所に刻まれたネイション形成の記憶は、記憶のトポロジーに付置され、記憶の景観が生産されるのである。こうした意味では、エンカルタシオネス博物館の事例は、この場所におけるネイション形成の記憶を継承しようとする「地域の博物館化」の成果ととらえることができるうえに、記憶の継承という日常的な行為に収束したナショナリズム・シフトの一形態と解釈することができる。

(4) ディアスポラにおけるナショナリズム・シフト

新大陸におけるバスク・ディアスポラの形成は、人口移動を確認できる資料が存在しないため記述による歴史的記録から説明しなければならないが、Douglass and Bilbao (1975)がそれに詳しい。それに基づけば、大航海時代以降に移住の波が4度あった。移民第1波は、16~18世紀のスペイン植民地開拓期の移住である。当時の移民出身地は重荷カスティージャ王国であったが、バスク人も新大陸の開発や貿易で重要な役割を担い、政治的・経済的エリート集団が都市部に、農地や鉱山の開発に農民らが移住した。移民第2波は、ラテンアメリカ諸国独立以降の19世紀である。この時期のバスク人移民の特徴は、ラプラタ地域での牧羊業の発展に誘引された農民、カルリスタ戦争から逃れる政治的亡命者にあった。特に1876年バスク3県の地方特権が中央政府により廃止されたことで、それに反発する知識階層が移住し、主にアルゼンチンやウルグアイのバスク・ディアスポラにおいて政治活動拠点としてバスク・センター(バスク語で euskal etxea 「バスクの家」、以下「センター」と呼ぶ)を設立し、そこで故地のナショナリズム運動を支援する政治活動を展開した。移民第3波は20世紀前半であった。1935年に勃発したスペイン市民戦争でバスク地方が主戦場になったため、政治活動家のほか一般市民のバスク人も新大陸へ移住した。20世紀初頭のアメリカ合衆国は移民の受け入れに寛容だったため、多くのバスク人が牧羊業参入を目的に移住したが、1924年の移民法で国別入国割り当てが厳格化されたためアメリカ合衆国への移民は急速に先細った。その結果、スペイン市民戦争時の移民はラテンアメリカ諸国のバスク・ディアスポラに集中した。移民第4波は1960~1970年代で、この時期は経済的成功を求める農民がアメリカ合衆国西部に多数移住し、そこで牧羊業に従事した。こうした移民の波は1970年代以降のバスク地方の政治的・経済的情勢の好転を反映して急速に収束した。

ディアスポラにおけるナショナリズム・シフトは、センターの活動重点の変化に反映される。センターは同胞の連帯を強化する同胞組織としての性格を有するが、バスク・ナショナリズム運動が活発だった時期には、バスク地方からの政治的亡命者の受け皿となり、故地のナショナリズム運動を支援する政治組織としての性格が強かった。センターはバスク人が移住した世界各地に存在するものの、19世紀中に設立されたものは、アルゼンチンのブエノスアイレスに3軒（図4）、キューバのハバナに1軒存在するのみであり、19世紀末のバスク地における地方特権廃止後の移民の主要な受け皿がブエノスアイレスであったことがうかがえる。その中でも、ブエノスアイレスに1877年に設立された Laurak Bat、1896年設立の Centro Vasco Francés は、政治活動組織としての性格が強く、機関誌をとおりて故地のナショナリズム運動を支援した。その後1980年までの80年間に世界各地に45のセンター（現在活動中のみ）が創設されるが、うち32が南アメリカ大陸（25がアルゼンチン）に設立され、特に前半に創設されたセンターは政治活動の拠点として機能した。

図4からわかるように、アルゼンチンには歴史あるセンターが多いが、同時に1980年代以降に設立されたものも多い。最近設立されたセンターは、設立当初から政治活動支援よりも同胞の連帯強化と文化広報に主眼を置く活動を展開している。さらに古い歴史を持つセンターも、現在では活動の重点が同胞連帯強化にシフトしている。これは、バスク州政府のディアスポラ政策が影響しているといえる。1979年に成立したバスク州政府は、大使館や領事館を持たないため、同胞支援組織としてセンターを利用した。さらに州政府は、静かなナショナリズム運動推進のためにセンターを利用し、バスク文化振興を名目に、センターに対して1988年以降活動支援補助金を拠出するようになった。当初の所轄は州政府文化観光省であっが、1994年にバスク州政府外務局がそれに当たるようになると、同胞支援が強化されるようになった。アルゼンチンで現在活動中の66センターのうち、半数以上の39センターが移民の波が終息した1980年代以降の設立である。これらは、バスク州政府が穏健なネイション形成を進めるようになったことに呼応して設立されたセンターであり、同胞の結束強化を目的とした活動を展開している。最近5年間のバスク州政府補助金に限っても、アルゼンチンに立地するセンターが200万ユーロ以上、同期間総額の約44%を受け入れている。このことは、バスク州政府が関与して進行中の故地のナショナリズム・シフトが、州政府からディアスポラへの資金流動というかたちをとりながら、ディアスポラにおける静かなナショナリズムへのシフトを推進しているといえる。

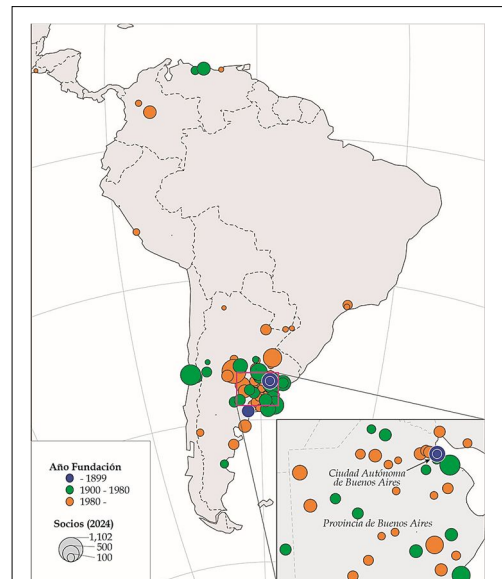


図4 南アメリカ大陸のバスク・センター。
バスク州政府資料と現地調査による。



図5 バスク州政府からバスク・センターへの国別補助金(2019-23)。
バスク州政府公報と現地調査による。

(5) 総括

南北アメリカ大陸におけるナショナリズム運動が穏健なネイション形成運動へ転換している現象は、故地のバスク地方における1980年代以降のナショナリズム・シフトと切り離して考えることができないことは、これまでの説明で明らかである。故地とディアスポラにおけるナショナリズム・シフトは、独立して進行する現象ではなく、故地とディアスポラの強固なつながりによって実現される共時的な現象であるといえる。それを実現させるのが、両者をつなぐヒトや組織のネットワークであり、人の移動が収束した後も維持される情報や資金の移動である。両者におけるナショナリズム・シフトは、これまでにバスク人が構築してきた故地とディアスポラを連動するトランスコンチネンタルなネットワークにより実現されるモビリティのポストモダンな形態であると結論付けられる。

文献

- Muños, Javier de (1991). *Plan especial Casa de Juntas de Avellaneda: Pulan puntual de las NN.SS. del municipio de Sopuerta, texto refundido*. Juntas Generales Bizkaia.
- Sarrionandia, J., Arruabarrena, J.M. and Angoitia, T. (2015): *Durangoko azoka 1965-2015*. Gerediaga Elkarte.
- Douglass, W.A. and J. Bilbao (1975): *Amerikanuak: Basques in the New World*. University of Nevada Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 石井久生	4. 巻 68(4)
2. 論文標題 スペインとフランスの国境地域としてのバスク地方	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 地理	6. 最初と最後の頁 38-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ISHII, Hisao	4. 巻 39
2. 論文標題 Recurso etnico y revitalizacion regional en festival cultural: Un caso de Durangoko Azoka en Durango, Euskal Herria	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 共立国際研究：共立女子大学国際学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石井久生	4. 巻 66(7)
2. 論文標題 ヒスパニック/ラティーノのいま	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地理	6. 最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井久生	4. 巻 13
2. 論文標題 文化の祝祭にみるエスニック資源と地域活性化 スペイン・バスク州ドゥランゴにおけるブックフェアの事例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地理空間	6. 最初と最後の頁 197-214
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24586/jags.13.3_197	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石井久生	4. 巻 27
2. 論文標題 20世紀初頭のアメリカ西部にバスク人が生産したエスニック景観 ネヴァダ州エルコの事例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 143-161
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 Ishii, Hisao
2. 発表標題 Durangoko Azoka geografo japoniar baten ikuspuntutik.
3. 学会等名 Durangoko Azoka 2023 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石井久生
2. 発表標題 祝祭におけるエスニック資源の活用 スペイン・ドゥランゴにおけるバスク・ブックフェアの事例
3. 学会等名 地理空間学会(13回, オンライン)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 池本修一監修, 石井久生ほか分担執筆	4. 発行年 2020年
2. 出版社 帝国書院	5. 総ページ数 75
3. 書名 新・世界の国々4 ヨーロッパ州2	

1. 著者名 帝国書院編集部	4. 発行年 2020年
2. 出版社 帝国書院	5. 総ページ数 80
3. 書名 新・世界の国々6 北アメリカ州	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------